

関東教区「日本基督教団罪責告白」学習会

2024年11月29日

赤羽教会 大友英樹

関東教区「日本基督教団罪責告白」本文

- (1)わたしたちは、聖書に証しされた唯一の神を信じ、イエスを主と告白する信仰に立ちながら、天皇を神とする国家体制を容認し、天皇を拝し、神社参拝をするなど過ちを犯しました。ことに、神にのみ献げるべき礼拝において、君が代斉唱、宮城遥拝などを「国民儀礼」として取り入れ、これらの「偶像礼拝」を朝鮮・韓国・台湾・中国等、アジアの諸教会及び在日のアジアの隣人に対しても強要する罪を犯しました。
- (2)わたしたちは、天に国籍を持つ「神の民」であるにもかかわらず、天皇制国家の臣民であることを誇りとし、主の御心に従うより、天皇の意思に従うことを優先させました。その結果、天皇中心の国家主義をアジアにまで広げようとする国策を、「神の国」の実現であるかのようにみなし、植民地支配に協力する罪を犯しました。

丸山真男（「日本の思想」1957年、『日本の思想』所収）

「『國體』という名でよばれた非宗教的宗教がどのように魔術的な力をふるったかという痛切な感覚は、純粋な戦後の世代にはもはやないし、またその『魔術』にすっぽりはまってその中で『思想の自由』を享受していた古い世代にももともとない。しかしその魔術はけっして『思想問題』という象徴的な名称が日本の朝野を震撼した昭和以後に、いわんや日本ファシズムが狂暴化して以後に、突如として地下から呼び出されたのではなかった。日本のリベラリズムあるいは『大正デモクラシー』の波が思想界に最高潮に達した時代においても、それは『限界状況』において直ちに恐るべき呪縛力を露わにしたのである」（例：虎ノ門事件 1923年）

1. 海外活動

- ①日清戦争（1894年）、日露戦争（1904年）を経て、韓国併合（1910年）によって、日本の特権地政策が拡大していく（台湾・南樺太・関東州租借地・朝鮮）
 - ・矢内原忠雄（海老沢有道・大内三郎『日本キリスト教史』1970年）

「日清戦争は帝国主義の性質をもった戦争ではなかった。……日露戦争の性質は半ばは国民主義、半ば帝国主義の戦争であった」（579頁、引用元：矢内原忠雄『現代日本小史』1952年）
 - ・加藤陽子（『それでも日本人は「戦争」を選んだ』2009年）

マーク・ピーティー「日本の植民地はすべて、その獲得が日本の戦略的利益に合致するという最高のレベルでの慎重な決定に基づいて領有された」（192頁）→安全保障上の利益
 - ・憲法上の植民地（美濃部達吉『憲法講話』1921年）

植民地：本国の国法上の属地であり、本国とは原則、法律制度を異にする
憲法：「天皇は国の元首にして統治権を総攬し此の憲法の条規に拠り之を行ふ」（第4条）

→新領土にも憲法の効力があるか、政府解釈は効力がある（租借地除く）
→実際は憲法に準拠する統治ではなく、総督府の制令による統治、憲法の効力はなし×参政権、×兵役義務、×官職）

人民：日本の領土となったため帝国臣民（台湾・南樺太は選択制度、朝鮮併合は国家すべての併合であるゆえ選択の余地なし）

警察：朝鮮の警察機関 憲兵・警察官→トップ（憲兵＝警察官）

・日韓併合の態度

海老名弾正

日露戦争の頃より「朝鮮合併論」を唱え、併合を歓迎し、朝鮮人は他国への隷属状態より独立の大国民に復活すべきである。「吾人人道の名を以て日韓の合併を謳歌」せざる得ない（「日韓併合を祝す」1910年）

「朝鮮人にしてもし帝国の内部に胚胎する靈的帝国の臣民たるを得んか、是れ取りも直さず、将来の大日本帝国を形成する忠臣義士たる人である」（「朝鮮基督教徒の使命」1912年）。⇒臣民としての教化

植村正久

「韓国は遂に帝国の版図に併合せられたり。旭日（きょくじつ）の旗章輝きて、鷄林（朝鮮のこと）の朝真実鮮かなれかしとは、吾人の心に祝い肅（つつし）みて神に祈るところなり。（申命記 31 章 7～8 節を引用して）わが国の朝鮮における関係は、その由って来るところ深くかつ久し。実に神がこの国民に『先祖のために与えん』と誓われしものなりと感ぜずばあらず。……神より『先祖たちに』朝鮮国を『与えられ』たるものなるがゆえに、これを併合するの権利有るなり」（「大日本の朝鮮」1910年）⇒神の摂理

「彼らは集会に熱心である。この点日本のキリスト教徒よりも遥かにえらいとはすべての観察者のゆるすところである。…彼らは聖書を学ぶに甚だ熱心である。…彼らは概して比較的に外の朝鮮人よりも清潔で、精勤で、正直で、半島人民の中に多くの点において、見事なる異彩を放って居るとは、彼らを精密に観察したものの批評である。……朝鮮のキリスト者が国を憂え、独立を重んじ、他の勢力に対して反抗するの氣勢を保つということが事実ならば……高尚な精神的方面から人道の側に立ち、これを批評するならば、かえって末頼母しく、後世恐るべしとでも言うが適當であるまいか」（「朝鮮のキリスト教」1910年）⇒朝鮮キリスト者への評価

・日韓併合前後のキリスト者の関連事件

伊藤博文暗殺事件（1909年）

安重根（アンジュングン）：カトリック教徒、満州視察中のハルビン駅にて暗殺
1911年3月死刑

寺内正毅（てらうちまさたけ）総督暗殺陰謀事件（1911年）

鉄橋開通式の帰路、宮川駅で殺害計画、未遂に終わる。キリスト教指導者、ミッションスクールの学生など700名ほどが捕らえられ、123名が検挙、105名にが有罪、拷問による供述が明らかになり、宣教師が世界に発信したことにより国際世論に手前、1915年までに全員を釈放した。

三一独立運動（1919年）

1919年3月1日、ソウルにて三一宣言、平和的な行進、全国的に独立万歳が広がった。死者750名、検挙者数2万人、投獄されたキリスト教徒2200人、天道教徒1400人、仏教徒70人、宣教師により事件が報告、アメリカ議会から総督府に建議書⇒日本政府：キリスト教への警戒

②植民地伝道

・組合教会

第26回総会・信徒大会決議「新たに加えられた朝鮮同胞の教化」

主任：渡瀬常吉（わたせつねよし） 朝鮮京城学堂（1899～1907年）

1911年海老名らと共に朝鮮に渡り、朝鮮総督を訪ね、10年のうちに教会150、朝鮮人教師70人、朝鮮人信徒数15,000人

伝道資金のため1912年に5年間10万円、1917年に3年間50万円募金（組合教会年鑑経費1万円）

⇒政財界の後援：寺内、大隈、渋沢、財閥（岩崎・三井・住友）

朝鮮総督府機密費より年間6,000円（柏木義円の批判）→同化政策

朝鮮人教会の自治、相互協力、教会総会代議員を認めず⇒組合教会規約に反する

渡瀬の朝鮮伝道は朝鮮総督府の側にあり、同化政策への貢献

⇒柏木義円、湯浅治郎、吉野作造

朝鮮伝道部→朝鮮会衆教会として組合教会より独立（第37回総会1921年）

・日本基督教会

神社参拝問題

「朝鮮の教会は神社参拝を拒否して殉教した五十余名の牧師、長老、伝道師をもっている。そして約二〇〇〇名の教会員がそのために投獄された経験をもっている」

（澤正彦「朝鮮」『アジア・キリスト教の歴史』所収）

日韓併合により教育分野では、御真影、修身などで臣民教育がなされ、各所に神社が建てられ、神社参拝が強制されるようになる

1925年朝鮮神社建立、1936年南次郎総督「一村落一神社主義」（23,000神社）

1935年平壤のミッションスクール宣教師が知事の神社参拝強要を拒否

神社問題により、1938年までに長老系のミッションスクール25校廃校

1938年、日本基督教会大会決議「神社は宗教ではなく、基督教の教理に違反しないという本意を理解する」→富田満（大会議長）朝鮮総督府の依頼により朝鮮長老教会巡回（神社の非宗教、神社参拝は国家祭儀で国民に要求）

同年、朝鮮耶蘇長老教会総会：官憲の監視のもと神社参拝を強行採決→反対者2000名が投獄、50名は獄死